

授業科目名	授業担当者(担当)氏名	区分	単位	年間授業時間	受講学年	開講年次
作品分析Ⅱ	池原 舞	必修	2	30時間	2	毎年

《授業の概要》

本クラスでは、西洋音楽諸作品を、様々なコンテキストをふまえて読み解く。例えば、ある時代特有の美学、文化の伝承あるいはその解体、文学や絵画や哲学といった音楽外のジャンルからの影響など、多角的な視点を交えて楽曲を分析する。こうした方法論を学ぶことで、作品が新たな意味を帯び、解釈に多様性がもたらされることを体感する。なお、扱うピックや楽曲は、履修者の専攻や理解度によって変更する場合がある。

《到達目標》

西洋音楽諸作品の分析における、広がりをもった方法論を知る。一つの作品への光の当て方によって、作品が新たな意味を帯び、解釈に多様性がもたらされることを体感する。

《授業計画》

第1回 [4/11(火) 14:00~15:40]

授業: 有機的統一の美学

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンのいくつかの交響曲の分析を通じて、西洋芸術音楽が重視してきた「有機的統一」の概念の一端を明らかにする。

事前: ベートーヴェンの《交響曲第7番》を聴き込んでおく。

事後: 講義内での分析を経て、ベートーヴェンの楽曲における「有機的統一」について、感じたこと、考えたことを1000字程度でまとめる。

第2回 [4/25(火) 14:00~15:40]

授業: シェーンベルクの12音技法

アーノルト・シェーンベルクの初期の音列作品および12音技法作品の分析を通じ、彼の音楽思想へのベートーヴェンの主題発展の影響を解読する。

事前: シェーンベルクの「12音技法」の仕組みを確認する。

事後: 講義内で課題として配布したシェーンベルクの楽曲を分析する。

第3回 [5/9(火) 14:00~15:40]

授業: シューマンのツィクルス構造

ロマン派の芸術家たちは、ベートーヴェン流の「有機的統一」から脱し、ゆるやかな内的連感を保持しながらも、むしろ断片化、並列化によって、独創性を追求した。その一例として、ロベルト・シューマンの《詩人の恋》を分析する。

事前: シューマンの《詩人の恋》を聴き込んでおく。

事後: シューマンと同時代の文学作品を1冊読む。

第4回 [5/30(火) 14:00~15:40]

授業: 「水」の表現、表象

フェリックス・メンデルスゾーン、フレデリック・ショパン、クロード・ドビュッシー、モーリス・ラヴェル、ベアラ・バルトークにおける「水」、「泉」、「海」、「舟」にまつわる作品を集め、典型的な水の描写を確認するとともに、うちいくつかの作品を解釈学的に分析・比較検証する。

事前: 「水」、「泉」、「海」、「舟」にまつわる作品にどのようなものがあるか調べて、書き出す。

事後: 講義内で扱わなかった「水」をピックにもつ作品においてはどのような表現が見られるか、任意の1曲について500字程度でまとめる。

第5回 [6/13(火) 14:00~15:40]

授業: 標題音楽的分析

リムスキー＝コルサコフの《シェエラザード》の分析を通じ、標題音楽的解釈に加え、「オリエンタリズム」の視点を交えて考察する。

事前: リムスキー＝コルサコフの《シェエラザード》を聴き込んでおく。また、作品概要を調べておく。

事後: 「オリエンタリズム」をテーマにした美術作品を複数探し、鑑賞する。

第 6 回 [6/27 (火) 14:00~15:40]

授業: 東洋的時間空間の探求

イーゴル・ストラヴィンスキーの《3 つの日本の抒情詩》、モーリス・ドラージュの《ラガマリカ》を中心に 20 世紀初頭のヨーロッパにおけるオリエンタリズムを概観したうえで、1960 年代以降のアジアの作曲家たちの挑戦に目を向ける。扱う作品は、武満徹の《マスク》と《径》、尹伊桑の《ガサ》。

事前: 尹伊桑の《ガサ》を聴き込んでおく。

事後: 1960 年代の構造主義からポスト構造主義への流れについて復習する。

第 7 回 [7/4 (火) 9:20~11:00]

授業: バロック音楽と修辞学

バロック音楽における修辞学的解釈を参照し、ヨハン・セバスティアン・バッハ、およびゲオルク・フィリップ・テレマンのいくつかの作品を読み解く。

事前: 「音楽修辞学」とは何か調べる。

事後: 半年間の講義で扱った方法論を参考に、任意の楽曲を一曲もしくは一楽章選び、その作品周辺のコンテキストを踏まえて分析し、レポートを作成する。

第 8 回 [9/5 (火) 14:00~15:40]

授業: 分析レポートの返却(個別指導)

事前: 任意の作品による分析レポートを提出する。

事後: レポートの講評を参考に、再考察する。

第 9 回 [9/19 (火) 14:00~15:40]

授業: マーラー、ニーチェ、フロイト

グスタフ・マーラーの《交響曲第 3 番》を、フリードリヒ・ニーチェの進化論的構想を軸に分析する。また、第 4 楽章の歌詞内容を、ジークムント・フロイトの影響をふまえて解読する。

事前: グスタフ・マーラーの《交響曲第 3 番》を聴き込んでおく。

事後: 講義の内容をふまえて、世紀末ウィーンの芸術表現について、感じたこと、考えたことを 1000 字程度でまとめる。

第 10 回 [10/3 (火) 14:00~15:40]

授業: 自筆譜研究と歴史の塗り替え

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルトの《ピアノ・ソナタ第 11 番》における従来版と 2014 年に発見された自筆譜の比較を通じ、資料研究の重要性を確認するとともに、版の選択などを含め、演奏家がこうした問題にどのように向き合う必要があるかについて考察する。

事前: モーツァルト《ピアノ・ソナタ第 11 番》「トルコ行進曲付き」(K.331)の第 2 楽章を聴き込んでおく。

事後: 任意の 1 曲について、2 種類の異なる版を比較し、演奏する。

第 11 回 [10/10 (火) 14:00~15:40]

バルトークと民謡

授業: バルトークの民謡採譜のプロセスを知ったうえで、《ルーマニア民俗舞曲》および《ラプソディー第 1 番》にどのように民謡旋律が反映されているのか分析する。

事前: バルトークの《ラプソディー第 1 番》を聴き込んでおく。

事後: 民謡が用いられている西洋音楽作品を 1 曲選び、オリジナルの民謡の音源を探して聴く。

第 12 回 [11/14 (火) 14:00~15:40]

授業: 音楽における「引用」について

音楽作品に別の音楽作品の「引用」が含まれる事例を扱い、それぞれの意味論を読み解く。扱う作曲家は、モーツァルト、ドビュッシー、ルチアーノ・ベリオ、エリック・サティ、アルヴォ・ペルト、サルヴァトーレ・シャリーノ。

事前: ある楽曲に別の曲が引用されている事例を 3 作品以上探す(作曲家名、作品名、作曲年、引用作品名を記す)。

事後: 講義内容を参考に、事前学習でピックアップした各々の楽曲における、引用の意義や効果を簡単にまとめる。

第 13 回 [11/21 (火) 14:00~15:40]

授業: カデンツァについて

協奏曲の「カデンツァ」の歴史を追う。とくにベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》における複数のカデンツァを比較・分析し、カデンツァの違いによる楽曲全体の聴取の変化について議論する。

事前： ベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》を、カデンツァの異なる複数の録音で聴く。

事後： 講義内容をふまえて、オリジナルのカデンツァを作曲する。

第 14 回 [12/5 (火) 9:20～11:00]

授業： 不確定性の作品

20 世紀後半に隆盛した不確定性の作品に焦点を当てる。カールハインツ・シュトックハウゼンの《ピアノ曲 IX》の複数バージョンの比較を中心に、作曲家の役割について再考する。

事前： シュトックハウゼンの《ピアノ曲 IX》を一人の演奏家の演奏で聴き込んでおく。

事後： 講義内容をふまえ、「開かれた音楽」について、感じたこと、考えたことを 1000 字程度でまとめる。

第 15 回 [1/16 (火) 14:00～15:40]

授業： 音と無音

ジョン・ケージの《4 分 33 秒》を、3 種類の楽譜、およびケージの作曲スタイルの変遷から分析する。また、美学的、哲学的視点からこの作品についてディスカッションする。

事前： 佐々木敦『4 分 33 秒論』(東京：株式会社 P ヴァイン、2014)を読む。

事後： ケージの《4 分 33 秒》を演奏・録音して提出する。

《履修資格／履修に必要な予備知識や技能》

2 年次生

《授業の形式》

講義

《成績評価の要点》

試験：0% 提出課題・作品発表等(提出された事後学習およびレポートの完成度)：60%

受講姿勢(事前学習および講義内における理解度)：40%

成績評価は、上記の項目に基づき「優」「良」「可」「不可」で評価する。

《課題(試験・レポート等)に対するフィードバック方法》

事後学習についてのフィードバックは、次の回の冒頭で一括して行う。第 7 回講義後に提出されたレポートは、第 8 回で個別にフィードバックを行う。

《事前・事後学習、必要時間》

1 コマにつき、およそ 180 分程度の事前事後学習を必要とする。

《授業時間以外で、この授業内容等について質問がある場合》

オフィス・アワーを活用していただきたい。それ以外は、メールにて受け付ける。